

音楽、舞踊、演劇などの芸能は、我々が共有する世界観、存在の意味を眼の前に具現化してみせる (Royce 2004)。このような機能を持った芸能の上演には、特定の集団が関わり、特殊な身体技法がその集団によって継承されている場合が多々ある。たとえば、インドの演劇においては、サンスクリット演劇から民俗劇に至るまで、ヒンドゥー教の神々の世界を垣間見ることができる。サンスクリット古典劇クーリヤッタムのように、神々の世界を現出させる演じ手が特定のキャストに属する場合、芸能は、ローカルな社会関係の発現の場となる (Richmond et al. 1993)。

更に、芸能はネーションの歴史を喚起するものとして、国家による支援を受ける場合もある。先に挙げたインドのクーリヤッタムの場合、演じ手たちは、国の芸術機関であるサンギート・ナータク・アカデミーの支援を受け、劇の保全に努めている。

しかしながら、芸能をローカル及びネーション・レベルでの社会構造の発現として考える見方は、近年、再考を迫られている。それは、国境を越えた人・もの・金・情報の流れにより、地球規模のネットワーク化が加速するグローバリゼーションと呼ばれる現象と関係している。演じ手の移動、メディアによる表象などを通じて、芸能はローカル/ナショナルの境界を越え、これまでとは異なる形で受容されるようになる。その過程で、従来とは異なる関係性や価値観が芸能の中に立ち現われてくる。本研究では、このような芸能の変容を通して、近年のグローバリゼーションと南アジア社会の変容を人類学的に考察することを主な目的とする。

以下では、本研究の目的、構成メンバーと役割分担、研究計画について述べた後、2011年10月10日に開催した第1回研究会での議論を紹介する。

研究の目的

本研究の目的は、グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の現状を、同地域の政治・経済・社会的変化という文脈に位置づけ、人類学的な観点から明らかにすることである。南アジア地域における社会変化の端緒は、インドで起こった1990年代の経済自由化である。2000年代に入り、海外からの資本流入、購買力を有する中間層の増大、世界各地の大都市への労働力の移動、ケーブルテレビ・携帯電話・インターネットといった情報メディアの普及などが、南アジア社会に更なる変化をもたらしている。

南アジア社会の構造変化は、音楽、舞踊などの芸能にも反映されおり、南アジアという地理的範囲を越え、幅広い層に受容・消費される芸能が現れている。そのような芸能に携わる実践者たちは、ローカルな観客のみならず、グローバル

な観客・消費者の存在を見据え、従来とは異なる美意識とパフォーマンス、市場経済原理に合わせたマネジメントとマーケティングなどを通じて、芸能の形態を変化させる必要に迫られている。そして、芸能の変容は、実践者・観客・消費者のライフスタイルに影響を与え、更なる社会の構造変化に結びつく可能性を持つ。

芸能は、ある社会に生きる人々の価値観を具現化させる働きを持つ。グローバルな人・もの・金・情報の流れに対する芸能実践者たちの対応を明らかにすることで、芸能と南アジア社会の構造変化の相互作用を捉えることができると考える。

具体的には以下に挙げる3つの作業を行う。

①現代南アジア社会における芸能形態の変容・動態と、その歴史的な過程を問い直す。芸能研究については、2000~2001年度に共同研究として実施された「南アジア音楽・芸能研究の再検討」(代表者 寺田吉孝)の成果 (Terada 2008)を踏まえ、ここ10数年の間に新しく芸能に生じている変化の要因と問題点を明らかにする。

②従来の研究は、映画、音楽など、ポピュラー・カルチャー化した芸能を取り上げ、植民地支配、都市化の進展と人の移動、メディア技術の発展などの大きな枠組みでグローバリゼーションと南アジアの文化動態を論じてきた。本研究では、このような文化研究とは異なり、具体的な民族誌的記述を通じて、なぜ特定の芸能がグローバル化して流通するのか、流通

する芸能形式の違いや消費動向のあり方などを明らかにする。

③芸能とメディアの結びつきに注目することで、多元化するメディア状況がいかにグローバルな社会変化と連動し、かつ南アジア地域に生きる人々の生活世界を再定義しているのかを考える。映像・音声資料の収集と分析を行うことで、積極的にこのメディアの役割を認めるとともに、それによって生じるコンフリクト(たとえば、従来の伝統芸能とメディアを通じて変容した新しい芸能の形式のあいだのずれ)にも着目する。



バダル・アリー・ハーンのカウワーリー楽団 (2008年2月25日、パキスタン、村山和之撮影)。

構成メンバーと役割分担

インド、パキスタン、ネパールをフィールドとしてきた人類学者が主な構成メンバーである。いずれも現地社会における芸能実践者の生活世界を政治・経済・社会的文脈の中に位置づけ、総合的な視野に立って研究を遂行してきた。メンバーの役割分担は以下のとおりである。

<インド>

・西インド(主にマハーラーシュトラ州)におけるタマーシャー劇の現代変容と社会動態(飯田玲子 京都大学大)

学院博士後期課程)

- ・ <道>から生まれた芸能研究—大道芸から大道商人へ (岩谷彩子 広島大学大学院)
- ・ インド古典器楽奏者およびインド楽器産業の変容 (岡田恵美 東京芸術大学)
- ・ タミルナードゥ州宗教芸能のグローバル化と現代社会での役割 (小尾淳 大東文化大学大学院博士後期課程)
- ・ インド古典舞踊の現代的受容とグローバル化 (古賀万由里 慶応義塾大学非常勤講師)
- ・ ラージャスターン州タール沙漠の楽師集団のグローバルな動態と現地社会の変容 (小西公大 東京外国語大学現代インド研究センター)
- ・ ケーララ州の儀礼パフォーマンスの担い手たちの社会的流動性と脱領域的な実践活動 (竹村嘉晃 立命館大学非常勤講師)
- ・ インド西部ゴア社会の演劇ネットワークの脱領域的拡大と移民の動態 (松川恭子 奈良大学)
- ・ インド映画の環流 (杉本良男 国立民族学博物館)
- ・ 南インドの古典音楽の現代的受容とその拡大 (寺田吉孝 国立民族学博物館)

<インド (チベット) >

- ・ ダラムサラのチベット難民芸能集団による実践変容の動態的研究 (山本達也 日本学術振興会特別研究員)

<パキスタン>

- ・ パキスタンにおけるスーフィー芸能の現在—カウワーリーを中心に (村山和之 千葉大学非常勤講師)

<ネパール>

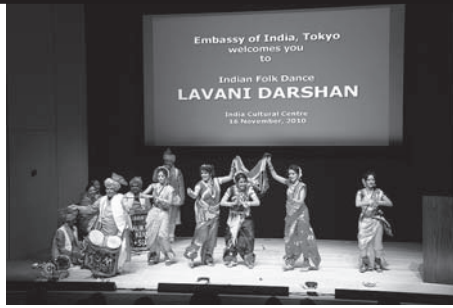
- ・ 現代ネパールにおける民謡の流通と再編成 (橘健一 立命館大学非常勤講師)

研究計画

初年度は、グローバル化と南アジア芸能の動態を理解していくために、従来の研究における論点を整理する。並行して、各メンバーが収集した資料と文献に関する情報をまとめ、共有する。2年目は、各地域の事例を検討し、グローバル化の中で変容する南アジア芸能の具体的な諸相を明らかにする。同時に、学会などで中間報告を行う。3年目は、前年度の中間報告で明らかになった問題について更に議論を深める。その成果を踏まえ、公開フォーラムあるいはシンポジウムを開催する。最終年度の4年目には、前年度の公開フォーラムまたはシンポジウムを踏まえ、研究成果の公開に向けて準備を行う。

南アジアにおけるグローバル化の作用を芸能にみる

2011年10月10日に開催された第1回研究会では、本研究を進めていく上での論点をいくつか確認した。そのうちの1つは、グローバル化の作用が南アジアにおいて働くとき、何を特徴として考えればよいのかという問いだった。この問いを考える際に参考になるのが、文化の「環流」である。現在、主にインド系移民によって伝えられたインド起源の宗教・ファッションなどが欧米の消費者に受容され、現地の文



インド・マハーラーシュトラ州の農村を中心に演じられてきたタマーシャー劇の日本における公演 (2010年11月16日、飯田玲子撮影)。

化と相互作用を起こして変化しながら、再びインドに戻ってくるという現象が生じている(三尾 2011)。芸能の動きも、この環流の流れの1つとして捉えることができる。ただし、芸能について考える場合、以下の2点に留意する必要があるだろう。(1) 芸能実践者をはじめ、観客や批評家をも含む関係者の中で、誰がどのような形でグローバルな人・もの・金・情報の流れにアクセスし、

芸能に新たな意味づけを与えているのか。芸能が環流する過程で「お墨つき」を与える専門家や国家機関の役割にも注意を払う必要がある。たとえば、本文の冒頭で挙げたインド・ケーララ州のサンスクリット劇クーリヤットム、他には同じくインド・ラージャスターン州のカルベリア・コミュニティの民謡と舞踊などが政府の認定を受け、世界無形文化遺産に登録されている。(2) 南アジアが歴史的に関係を結んできたのは、欧米だけではない。日本を含むアジア、中東、アフリカなどの地域とのあいだでの芸能の環流を視野に入れるべきである。インド・ゴア州の演劇ティアトルであれば、実践者であるゴア・クリスチャンの多いロンドンだけでなく、湾岸諸国で劇団が公演を行う。また、ゴアでの公演の際に劇中歌で湾岸諸国での出稼ぎの経験が歌いあげられ、観客と共有されることがある。

以上を念頭におき、本年度中に予定されている第2回研究会以降は、具体的な事例の検討を通じて、芸能に反映される南アジア社会の変容を捉えていきたい。



インドのゴア人コミュニティによりアラブ首長国連邦ドバイで上演されるティアトル劇のポスター (2007年9月9日、松川恭子撮影)。

【参考文献】

- Richmond, F. P., Darius L. Swann and Phillip B. Zarrilli (eds.) 1993 *Indian Theatre: Traditions of Performance*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Royce, Anya Peterson 2004 *Anthropology of the Performing Arts: Artistry, Virtuosity, and Interpretation in a Cross-cultural Perspective*. California: Altamira Press.
- Terada, Yoshitaka (ed.) 2008 *Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan* (Senri Ethnological Studies 71). Osaka: National Museum of Ethnology.
- 三尾 2011 「環流」する「インド文化」—グローバル化する地域文化への視点『民博通信』132: 2-7。

まつかわ きょうこ

奈良大学社会学部准教授。専門は文化人類学、南アジア研究。論文に「社会空間における舞台上の物語の共有/非共有—インド・ゴア社会における大衆劇ティアトルをめぐる」(小松和彦彦暦記念論集刊行会編『日本文化の人類学/異文化の民俗学』法蔵館 2008年)など。